

【学位論文審査の要旨】

本学位論文は、認知機能が低下している高齢患者に対する看護師の臨床における先見力測定尺度を開発しその信頼性及び妥当性を検証すること、さらに先見力に関連する要因を探究することを目的としている。この目的を達成するために研究1では、Hybrid Modelを用いて概念分析を行い、認知機能が低下している高齢患者に対する看護師の先見力を「認知機能が低下している高齢患者と家族に起こりそうな出来事や危機を予想し、その予想からより妥当な判断と行為を導く能力であり、予想外の出来事に気づく能力である」と定義した。この定義は先行研究にない新奇性があると評価できる。研究1の結果から尺度の暫定試案が作成され、予備調査を行った後、4つの下位概念と37項目の尺度試案を作成している。

研究2の本調査では、クラスター抽出法により選定された20の地域医療支援病院に勤務する看護師600名を対象とした郵送法による自記式質問紙調査を実施した。回答の得られた303名を分析対象とし、項目分析と因子分析の結果、「予想からより妥当な判断と行為を導くこと」、「認知機能が低下している高齢患者の潜在リスクの予想」、「認知機能が低下している高齢患者と家族の今後の生活の予想」、「認知機能が低下している高齢患者と家族の予想外の出来事に気づくこと」、および「認知機能低下を呈する高齢患者への対応が適切でない可能性の予想」の5因子構造の23項目からなる尺度が開発された。内的整合性はCronbach's α 係数を算出し、尺度全体では0.91、下位尺度は0.67~0.87が得られている。尺度の妥当性については、基準関連妥当性および弁別的妥当性を検証し、認知症看護認定看護師と臨床看護師間で全体および下位尺度得点で有意差 ($p < 0.001$) があることを示している。

さらに、確認的因子分析を用いてモデルの適合度を検証し、構成概念間の検証を共分散構造分析を用いて定量的に示したことも評価できる。共分散構造分析の結果から示された「患者と家族の今後の生活の予想」する能力の重要性は、今後認知症ケアに関する看護実践および看護教育において重要な視点を提供するものと言える。先見力に関連する要因として、認知症看護経験年数、臨床経験年数、認知症高齢者に対する意識と態度、認知症高齢者の日常生活自立度、認知症看護に関する継続教育が示されている。

本研究は、尺度開発における緻密な概念分析（理論的段階、フィールドワークの段階、分析的段階）の重要性を示した点、さらに日本における喫緊の課題である認知症高齢者および家族に対する看護者の実践の質向上に寄与するといえる。また、経験の浅い看護師や認知症者に関する経験知の少ない看護師でも、先見力の重要性について理解し、適切な時期に適切な看護介入を行う視点を提供することが期待できる。さらに研究結果は、認知症高齢者に関するアセスメントの視点および適切な看護介入方法と介入時期を開発整備する手がかりとして看護実践および研究、教育の質向上に貢献するものといえる。

審査会では、「先見力」の定義、研究の意義と独創性、概念枠組み、概念名、統計的分析手法、実践への貢献などについて質疑が行われた。これらの質問に対しては、妥当な回答

博士学位論文審査の要旨

が得られ、さらに研究に対する熱意および誠実性もみられ、今後の課題や看護研究者としての役割についても真摯な回答が得られた。

以上により、本申請論文は博士学位論文に値し、申請者は博士（看護学）の学位に相当する学識と研究能力を有するものと判断する。